



池田武邦（いけだ たけくに）
1924年 高知県生まれ
1949年 東京大学第一工学部建築学科卒業
同年 山下寿郎設計事務所に入社
1967年 日本設計事務所創立 取締役就任
現在 日本設計名誉会長／日本設計池田研究室代表／ハウステンボス環境文化研究所所長／長崎総合科学大学教授／日本建築家協会名誉会員・他



藤森照信（ふじもり てるのぶ）
1946年 長野県生まれ
1971年 東北大学工学部建築学科卒業
1978年 東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程満期修了
1996年 東京大学教授
現在 東京大学教授・工学博士／日本建築学会理事・他

ハウステンボスへの導きは
まさに運命としかいいようがない

藤森 実は僕、ハウステンボスが建築で発表される前にいろいろと取り上げられていましたけれど、まさか日本設計がやっているとは思わずああいうものはディズニーランドのように、僕の知らない事務所が設計していると思っていました。池田先生の仕事は独立してからも、超高層の関係や研究など行なっていることは知っていましたから、すごくびっくりしました。なんだか、ディズニーランドみたいで嫌だなと思ったのですが、ハウステンボスへ行ったことのある方に「行くとなかなか真面目だぞ」と言われ、一度行ったことがあるのです。その時、海水プラントなども見せてもらい、社長さんからいろいろお話を聞かせていただきました。あのような遊びの空間だけど、ちゃんと文化性が出るところまで建築らしさをあげているので、「これはただごとではない」と思いました。それに海の環境問題をきちんと考えていますよね。しかも、経済的なことでは相当無理をしてやっているのが分かるのです。そういうことを言う企業はいっぱいあるのですが、よく話を聞くとあまり無理をしているわけではないんですね。しかし、これは本気でやっているのではないかと思いました。その後池田先生のハウステンボスについての記事を読んで、やっぱりこれは本気だと思いました。あのハウステンボスは何となくやったのですか、それともああいうことをやろうと思った時期があったのですか。

池田 あれはもう20年以上前に西彼町という町の一角に小屋をおいたのがそもそもの始まりなんですよ。

藤森 山小屋のようなものですか。

池田 そうです。戦争中に沖縄の海に沈んで助けられた時、日本にこんなに美しい所があると初めて気が付いた場所が大村湾だったのです。それまで大村湾には軍人として佐世保の基地や大村航空隊などへ行ったり、戦地に行って戻ってきては休養したりしていたのですが、風景が美しいと思ったことは全くありませんでした。

藤森 軍人ですからね。

池田 そうです。戦争の真っ最中に沖縄特攻作戦に参加して、もう日本に還るとは思っていなかったところで助けられて海軍病院へ入ったのです。傷が癒えたのに次の配置が決まらない、という空白の時間の時に大村湾を見て、水は綺麗だし、昭和20年の4月でしたから山桜が緑の中にあってとても美しく感じたのです。それまで何度もそこにいたのですが、風景を眺める心理的な余欲などはありませんでした。それが船を沈められて、命というものをしみじみと感じ、なんて日本は美しいんだろうと思ったのです。もうそれは「国破れて山河あり」にぴったりだ

ったのです。その時にフトね、もし平和な時代が来て、自分が生きていたらここに住みたいと思ったのが一番最初なんです。

藤森 そのことはずっと頭の中にあったのですか。
池田 それが戦後、復員輸送に従事した後、東大で建築を学び昭和42年に日本設計を設立したりしていて、全くそんなことは忘れていました。日本設計をつくった時、設計事務所というのは人材しか資本でないからどんな人でも必ず私が直接面接して、女の人も採用したりしたんです。その面接で、ある人に「お国はどちらですか」と聞いたら「長崎です」と言ったのです。その一言を聞いたとたんに、大村湾がパッと浮かんで、「大村湾で、綺麗な所があったね」と言ったのがきっかけなのです。そうしたら、一緒に付き添いで来ていたおじさんというのが、大村湾なら知っている人がいますから紹介しますと言って、翌週に僕を連れて行ってくれたのです。

藤森 とても偶然とは思えないですね。

池田 そう、頭に浮かんできたとたんに、たまらなくなってしまったんです。

藤森 何年くらいのことですか。

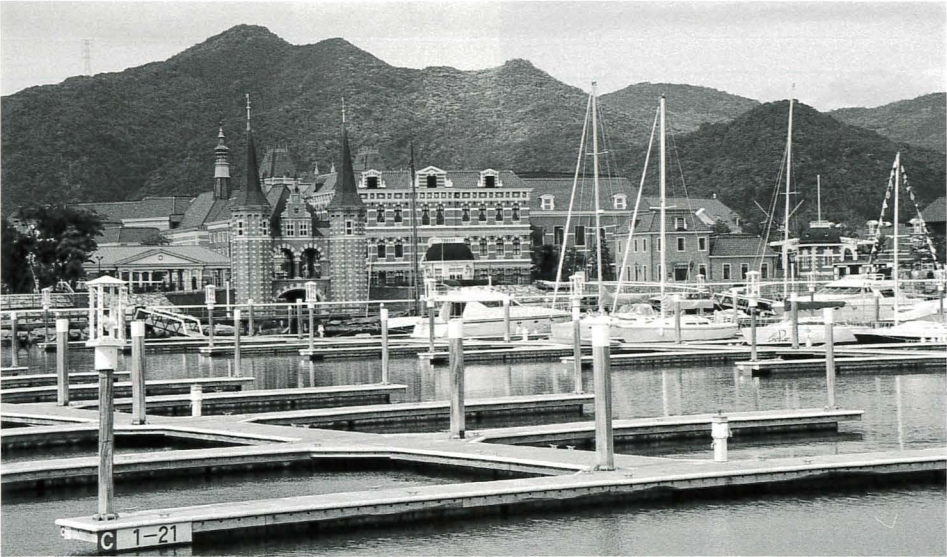
池田 昭和47年頃のことだと思います。

藤森 戦後30年くらいのことですね。会社も忙しくなってきた頃ですか。

池田 そう、日本設計を設立してまもなくの頃ですから、ものすごく忙しい頃です。まだ新宿ではなくて六本木にいた頃です。それで、紹介された人の紹介で、今のハウステンボスの社長、神近義邦氏に会ったのです。その時、彼は「なんで僕が不動産屋のマネをして、土地を世話するのだ」と思ったそうなんです。ところが、僕がなぜここへ来たのか理由を話したら「分かりました。どこでもいいから先生が欲しい所を言って下さい、必ず斡旋しますから」と言って、海岸線を2日間にわたって案内してくれたのです。その時に気に入ったところがあって、地主さんに話をつけてもらい、そこへ小屋を建てたのです。それから僕は、毎年お正月と夏休みに行くことにしました。大村の風景がたまらなく懐かしくて過ごしていたのです。

環境に対する作法を学ぶためにつくった
環境文化研究所

その時から神近氏とはお付き合いが続いているのですが、その中である時オランダ村の話が出たのです。そのオランダ村というのは、神近氏の先輩がやっている小さなレストランを改造したいということでした。「プライベートでやってあげましょう」ということになったのですが、そのレストランは国道206号線沿いにあるって、道路の方から入って裏の入り江の方はゴミ捨て場になっているんですよ。僕はその入り江が気に入って、もし改装するなら建物でなくて裏の



マリナよりホテルを望むハウステンボス

入り江を生かして、入り江を正面にと考えました。そういう発想にすれば、海が生きてくると思ってプランをつくったのです。それが最初は8,000万ぐらいだったんですけど、僕の構想でやると、2億か3億になってしまうんですね。そうしたら神近氏が、そういうことなら自分が代表として成り立てようと。無一文だったけれど、借金をして改造したのがオランダ村のはじまりだったんです。そのオランダ村をやる時に、さんざん神近氏と喧嘩しました。それは、借金だけでやるから、コストを下げた欲しいというのです。でも僕は僕自身が惚れ込んだ所だから、絶対環境を壊したくありませんでした。トイレを作るとき、浄化槽で20PPMまで浄化したものは海へ流しているのですが、大村湾はとても綺麗な海で2PPMです。そこへ20PPMを流したらたちまち汚れてしまうので、浄化槽にお金をかけて絶対に流さない、ということを提案したのです。そうしたら浄化槽の予算が倍くらいになってしまったのです。彼はそんなことをやったら、経営が成り立たないと言い出すので、「じゃあ、やめたら。自分の故郷を汚してまで、金儲けするのならやるんじゃない。本当に自分の故郷を大事にして、村が潤うような事業にしないではいけない。故郷を汚すような施設を造るのなら、僕は手を貸さない」と言ったのです。すると、彼も困ったらしいのですが、僕の方が筋が通っているから、浄化槽にお金をかけてもなんとか成り立つように経営計算したのです。そういうことを何度か繰り返して、オランダ村ができたのです。完成した翌年70万人の人が来て、次の年は120万人、3年目には200万人と。それはもう田舎道を車が列をなして、大変な騒ぎ

になったくらいでした。大成功したところへ県知事から、埋め立て地に工業団地を建てる計画が失敗して、その土地をなんとか駐車場にでも使ってくれという話があり、その場所を見に行ったのです。そうしたら惨澹たる所で、普通の人が見たらただの埋め立て地で、草が生えているだけの土地に見えるようなんだけれど、僕の目には、生態的にはめちゃくちゃ悪く見えました。要するに、捨て場のないヘドロや岩石で、かっこうだけは埋め立て地にしてあるけれど、護岸をコンクリートにしたことによって魚がぜんぜん寄り付かないし、ヘドロだから木が生えない。草が生えれば虫が来て、虫が来れば鳥が来てフンをして実生の木が生え、20数年も放置すれば普通の土だったら草がボウボウで、灌木があちこち生えているはずなんだけれど、ぜんぜんないのです。ここは徹底して自然を回復させなければならぬ。それにはどういうことをやらなくてはいけないのか。それから、いろいろ僕の知識を入れると同時に、生態学者の斎藤一雄氏にアドバイスをいただいて、徹底的に自然環境を回復させるような手立てをしました。埋め立った所へもう一度海を呼び戻すために、運河も入り組んでいると淀むから、淀まないようにするために工夫を凝らしました。神近氏は僕の言うことを、100％受けてくれました。お金がかかって自然を大事にするということが、経営的に成り立つ、と実験済みなんです。

藤森 モデルはオランダですか。

池田 実は、ハウステンボスの外観はオランダの街ですが、計画の理念は江戸の町なんです。江戸は運河の町で、ものすごく自然環境がよかったのです。例えばハウステンボスのホテルヨーロッパは、外観はアムステルダムにあるようなホテルにして、内容は船宿の現代版にしようということで、中庭まで海を入れて船でアプローチする。それでいて生態系が生きるように、潮の満干をうまく利用したのです。外観はオランダがモデルで、計画のフィロソフィは人間と自然との関わり合いということで、徹底して江戸をモデルにしたのです。オランダは平坦な国ですが、日本は山が迫っていてすぐ海があって、大村湾はまさにそういう地形です。だから、日本の風土に合った自然環境で回復するようなことをしないと成り立たない。それからどんなに設計が自然環境をよくしても、そこへ関わる人間が自然に対する作法を失っていたら、たちまち壊れてしまう。そこで神近氏と相談して、設計の段階から3,500人の全従業員を環境文化研究所の所員に、と提案しました。全スタッフを環境教育するということです。研究所という名前にしたのは、その着工前から着工中、使われている間に環境がどう変化するかを科学的にチェックするからです。8ヶ所で海の底生動物や水質を着工前からチェックさせました。そうすることによって陸上の作法が全部海に反映されるのが分かるのです。



水質保全のためにつくられた運河のあるハウステンボス

形をつくることだけが建築ではない
まして建築や環境というのはトータル的なもの

藤森 下流で見れば、上流が分かると…。

池田 そうです。環境文化研究所を始動させて、環境に対する作法の教育と同時に、科学的に今どんな昆虫がいるのか、どんな種類の魚が運河の中で見られるのか、どんな鳥がきているのかを調べているのです。そうすると、自然が回復しているのが分かるのです。それから、環境教育の中で一番の問題は、ゴミ問題です。ハウステンボスから出たゴミは、全部ハウステンボスの中で処理をすることを当初から決めていたのですが、そうすると、年間2,000t以上のゴミが出て1kg当たり49円50銭かかり、年間1億円以上かかることが分かったのです。そこで、なんとかゴミを出さないように、またゴミが出たら再生できるように考えました。それには仕入れを統一したり、梱包している用紙もいっさい中に入れない、中身だけ受け取るといったことを3年くらいフォローして、ゴミの量を減らしたのです。

藤森 どのくらいの量が減ったのですか。

池田 最初は全部ゴミとして処理していましたが、それが今では63.8%まで再生することができました。その中で大きいのは梱包していた紙や生ゴミですね。以前はそれも焼却していたのです。また、ホテルですから、生ゴミなどすごい量が出ます。それを全部コンポスト化しようとしたのですが、並大抵の事ではなかったです。

藤森 簡単にできないらしいですね。

池田 そう、匂いがでたり、途中で変なことになったり。

藤森 家庭でもみんなけっこう失敗しているみたいです。

池田 専門家に頼み、今は完全にコンポスト化できて、ハウステンボスの植生の肥料になっています。そのうちに農協なんか肥料を出そうという考えもあります。

藤森 それは全部敷地内でやっているんですか。

池田 ハウステンボスにはゴルフ場があるので、そこでコンポストしています。ただ最初は風向きによって、プレーしている最中にすごい匂いがするというクレームが出て大変でした。それから、今研究しているのはCO₂、温暖化問題です。ハウステンボスがCO₂をどのくらい出しているのかを全部調べて炭素換算したら、年間10,000tくらい出しているの、それをどうやって減らしたらいいのかをみんなで検討しています。このように、自然に対する作法を学ぶ研究所にしたのです。その作法もただ精神的なものではなくて、数値的な裏づけをきちんとデータで出して…。要するに人間が入った環境問題ということを設計の段階から考えていたので、それは今、着々と実っています。

藤森 それは、お客さんにも徹底してもらえばいいんだけどね。

池田 当初は考えていたのですが、やはり営業ですから、お客様の理解が得られることが前提になります。ここを最初に理解してくれたアレックス・カー氏が、あなたと同じように、なぜ日本人がオランダなんだというところで行く気がしなかったらしいんですよ。ただ取材を頼まれて冷やかして来たのに、驚いたそうです。まず電柱が全くない。何か違う、ここは京都を猛烈に批判しているすごい所だと、2回にわたって雑誌に書いてくれたのです。彼が一番最初ですよ、ハウステンボスが何を考えているのかを発見してくれたのは…。他に神谷宏治氏や高橋航一氏たちが来てくれて、神谷氏はすぐに「これはアーバンデザインです。ここまでちゃんとしたアーバンデザインをやっているのは、日本でここだけです」と言って下さいました。高橋氏は今でもけなしているけどね。いろいろ反応を見ると、建築界はやっぱりダメですね。頭からあんなのはコピーだと言い、なぜ日本があんなことをやるのだと言うのです。

藤森 やっぱり地域や地域周辺にある自然の環境、あるいは建築物におけるエコロジカルな部分に弱いですよ。

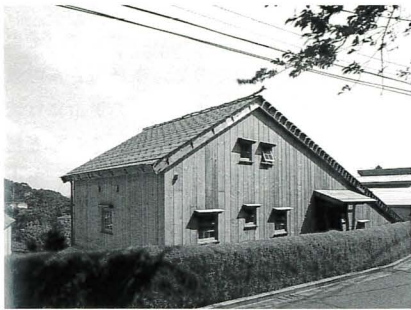
池田 知らなすぎます。

藤森 基本的に形をつくることだけが建築だと思っている部分がありますね。

池田 建築や環境というのはトータル的なものに、それぞれが専門分野になっています。生活が関わっているのに、そこが欠落していますよ。

自然に対する礼儀とは、
共生ではなく寄生するという思想

藤森 僕がたんぽぽやニラを屋根に植えたりすると、エコロジカルなことで理解されるのでそれがちょっと困るんです。ただ、自然というのが人間のつくるものとどう関係するのかというのが、僕の関心なんです。僕も当然エコロジカルな仕事をたくさん見ているのですが、例えばドイツのエコロジストの建築家は、建築を緑化するとき屋根に藪を造ります。僕はあれは間違っていると思うのです。人間がつくったものに対して人間は誇れないといけないと思うし、人間がつくる良さというものがあって、建築はその代表であり、ただ藪をつくればいいというものではないと思うからです。自然と人間が共生するというのはあり得ないことで、必ずあるのは寄生だと思うんです。特に都市においては自然が弱いわけだから、自然が寄生する。寄生するとしたら人間は寄生する植物を大事にしなければならない。逆に自然界においては、人間が身を小さくして邪魔にならないよう寄生しな



作家 赤瀬川原平邸「ニラハウス」

ければならない。自然は本気になれば圧倒的に強いんだから、それが礼儀というものです。僕は共生という言葉がまずいと思ったのは、責任が曖昧になっているからです。それともう一つ嫌だなと感じたのは、今まで平気で自然を壊してきた人達が、共生ということを一気に言い始めたことです。あれは、自然が口がきけるとしたら、うーんと怒ったに違いないね…。それに比べて、寄生というのは責任があります。例えば、自然豊かな大村湾の中に人工物を造ろうとしたら、造る側の自己規制が必要だと思います。寄生する側ですからね。しかし、建築の屋根の上に草がボウボウ生えているのは別のことで、あれは共生や寄生でもなく、建築の一部ではないと思ったんです。建築に植物を取り入れるというのはものすごく大変なことで、つまり建築内に入ってしまうから。コルビジュが屋上庭園と言いながら、ついに実現しなかったのはそれだろうと思うのです。彼の屋上庭園というのは、絵ではガンガンに描いているのに、実際は申し訳なさそうに木が生えている。それに比べて、一流の建築家は屋上庭園をやりません。大変だということを知っているからです。僕はそうではなく、建築と植物にはなんらかの接点があって、その接点は必ずデザイン可能のはずだと考えているのでやりたいと思ったんです。建築から産毛を生やすように植物を生やしたいため、たんぽぽハウスを建てたのです。

池田 そのたんぽぽは上手くいかなかったの？

藤森 ええ。まず、たんぽぽが咲いても下から見ると地味なんです。本当は新宿の高層ビルをたんぽぽにして日本たんぽぽを東京中に、と考えていたんだけど、やってみたら、たんぽぽは梅雨時に枯れて秋まで休眠に入って、見た目が汚いのです。今はポーチュラカを植えています。あくまでも建築と植物では建築が主体なんだから、そこに植物がいかに寄生するかですから。赤瀬川原平氏の家のニラは、すーっと伸びて最後に白い花が咲いて、それは成功しました。ただ植物ですから、毎年様子を見ながら改良をしています。僕の場合はむしろ、人間のつくっているものと自然とのいい関係があるのではないかと思います。追求しているのです。

池田 固体の中で考えると、日本の伝統的な農家など大したもの。あのすごい屋根の茅葺きをエレベーションで描くと、農家は殆ど屋根でしょ。あれが日本の風土に合った建築の原点なんです。そして、屋根はその土地の自然で作ったものだから、風景に馴染むわけ。

藤森 おまけに草の山。

池田 手入れをしないと木が生えてしまう。藤森さんのたんぽぽハウスを見た時、木が生えてくる場面を思い出して面白いなと思ったんです。

藤森 あれは木が生えないようにしています。木が生えてくると惨めな感じになるのです。植物というのは意外と攻撃的なもので、何が起きるか分からない。でも自然素材を使うのが、一

番いいのです。形の善し悪しよりも、とにかく自然に合う。自然素材を使うのは大変だけれど、間違いない。それと自然素材を使うと風化した時に綺麗なんです。プラスチックや金属など、歴史的に浅いものは汚く感じます。

池田 自然のものは風雪にさらされると時間がしみ込んでくるのですが、工業製品のように人間が手を加えたものは、手を加えた分だけメンテナンスをしてフォローしなければならない。自然のものは神様が作ったものだから、神様に任せておけば風格が出てくる。僕はそれを早くから取り入れて建築の素材、特に屋外に使用しました。

藤森 おそらく工業製品では基本的にコーキングでしょ、プラスチックだから。

池田 本当は毎年のようにメンテをしなければならない。僕は自宅を設計してそう思った。

藤森 この辺りの超高層なんかは、できるだけ見えないように年中やっていると聞きました。

池田 本来、建築の文化は地域に根付いているはずなのに、僕なんて日本の伝統的な住まいの在り方を、東大では教わらなかった。

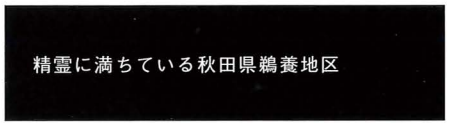
藤森 今でも教えていません。

池田 繋がっていないんです。東大を頂点とする日本の建築界に大きな弱点があると思います。

藤森 近代化するには良かったのですが…。

池田 今からでも遅くないから、もう一度そこを踏まえて欲しい。

藤森 地方は江戸時代の中期くらいまで人口が戻り始めていて、昔のような自然に戻ることができのではないかと思います。古いものも相当残っていますので、それを再生するには隠れ里のようなものを大事にすればうまくいくような気がします。



池田 僕がやっている池田塾で調査をしている秋田の鵜養は、まさにそういう理想的な所なんです。

藤森 僕が思うには、日本にもまだそういう所が1県に10ヶ所はあります。けれども田舎の人は誰も理解できない。子供の頃から見ているから、何がいいのか分からないみたいです。

池田 最初に話した西彼町は、僕が惚れ込んだ所ですが、そこに住んでいる人は生まれた時から住んでいるので何でここがいいのか分からないって言うんですよ。僕は夕日が綺麗で素晴らしいと思ったのに、こんなの当たり前だと言うのです。やっぱり都市に憧れていて、自分達は遅れているのだそうです。秋田の鵜養は本当に理想的な環境だし、生活も自然と交わっていて素晴らしいのです。例えばここには高齢者が大勢いて、冬の暖を取るために薪を里山へ



小高い山に囲まれた「隠れ里」的な景観の秋田県鶴巻地区

取りに行くのですが、毎年場所を変えて最初の場所に戻るのは33年と、江戸時代からの生活を続けています。まさに自然の再生産の範囲内で生きて、それも十分保っているのです。21世紀のお手本のようなことをやっているんだけど、集落に住む若い人達は、俺達は遅れているって言うのです。その土地に根付いた文化というのは、その土地の人が一番分らないんです。これからは、今まで遅れていると思っていたことが、実は最先端なんだという価値観の転換が大事だと思っています。

藤森 そうですね。先生が今「里山」と言われましたけれど、里山というのは、日本にしかない概念なんだそうです。例えば、人がいる里がありますよね。そこには畑があって傍には山があります。その山は人工の山です。そしてさらにその奥にはもっとすごい山、奥山・深山があるのですが、農村生活の事を考えている学者が、きのこを採ったり、木を切ったり利用する山を「里山」と名付けたのです。

池田 それはいつ頃のことですか。

藤森 それは20年くらい前のことです。

池田 そんなもののなの。それでは英文名はないのですか。

藤森 ありません。里山という概念を初めて分析することができたのも最近なのです。誰かがちゃんと概念を論文で書いて、本を出したらしいです。

池田 それからあっという間に広がったんだ。

藤森 みんながそういうことを必要に感じていたわけですよ、曖昧だったから。

池田 それは誰が考えたのですか。

藤森 僕も具体的には知りません。昆虫学者や生態学者たちも「里山」とは知らなかったけれど、体験的には理解していました。なぜなら、里山という所は一番昆虫がいるからです。山と里の昆虫が里山にはいて豊かなのです。人間が半ば手を入れた自然がそこにはあるのです。僕自身、里山のことは理学の先生に批判されて知ったのです。どうということかと言うと、僕の育った信

州の山に全く人が入らなくなったのです。そのため倒木がたくさん出たので、赤瀬川さんの家を建てる時に使ったのですが、その里山には猿や熊が出るようになったそうです。その事を記事で書いたら、その先生に「考えが甘い、里山はほととけば自然の山に戻るかも知れないけれど、そこに住んでいた重要な小動物や昆虫がいなくなるから、里山にはちゃんと人の手を入れなければならない。猿や熊が里山まで来ると人間があぶない」と言われたのです。

池田 確かにこの間、水没した新潟県のみもて村の記録映画を観ていたら、深山に入るところと里山と、はっきりと分かれているのです。明確な村の掟があって、絶対にみだりに深山に入ってはいけないのです。そこからこっちの里山は自由なんだけれど、深山は絶対に入ってはいけません。熊を取りに行く時など、しかるべき時のみしかダメなのです。

藤森 なるほど。そこには恐いものがあった、人界ではないと…。

池田 みだりに人は入れず、選ばれた人しか入れないすごい境界があるのです。子供がうっかり入ろうとすると、絶対入ってはいけないって言われる。それは里山と深山の違いです。

藤森 僕が子供の頃、山番というのがあって、週に一度父と一緒に山を回るんです。でも深山には入らず、隣の村との境、つまり里山を回り、境に木があるのですがそこへ札をかけるのです。その頃、薪というのは町へ持って行くと経済的に価値のあるものだったから、盗伐がけっこうあったのです。それを守ったり、崖崩れを見つけないためにやっていたのです。そういう暮らしをしていたのが大学に入って建築を学んだからは、そういうことを一切忘れていました。最近ですよ、思い出したのは。

池田 僕も超高層を設計して自分のオフィスを持ったときですね、何か違うと感じたのは。子供の頃、こんなことをするとバチが当たるという言葉がありましたよね、今は死語になっているけれど。バチが当たるというのは、神様が満



左から藤森氏、池田氏（7月18日山の上ホテルにて収録）

ち満ちているところで悪さをすると見られている感じがするわけですよ。子供心に川にゴミを捨てたりできなかった。なんともいえない恐れというのが、戦後なくなってしまったね。

藤森 そうですね。

池田 ハウステンボスに森をつくり、自然を回復させてどんな昆虫や鳥がいるのか調べているのですが、今年は去年よりも昆虫や鳥の数が減っているのです。たぶん、山がもの凄く豊かになり、今まで山の方から里山に来ていたのがみんな山に戻ってしまったせいだと考えられます。それから集落の美学としては素材が大事です。それを新建材で建てたらとたんにダメになる。今、増えているんだよ。自然がいくらいいいといたって、人のぬくもりがないとダメなのに。

ローカル・アーキテクトを生んだ 精神的空間

藤森 そうですね。ところで、宮本先生とはどれくらいの付き合いなんですか。

池田 僕と宮本先生とはもう古い付き合いなんだけれど、地域に根付いた「ローカル・アーキテクト」が日本でも大切なのに、一般にはずっと中央指向だったじゃないですか。ところが宮本先生の場合はしっかりと地域に根付いて、なかなかいい仕事をやっておられる。僕の尊敬する数少ない建築家の一人です。

藤森 宮本先生の御両親が建設会社をやっていた、というのを聞いたことがあります。宮本先生は佐藤総合におられたんですね。家業を継ぐ形で故郷に帰るという人は日本中に大勢いますが、あの人達の頑張りが地方をよくするし、地方で

の仕事がしっかりしているから全国でも仕事ができる。長野県にはそういう人がけっこういて、他に降幡廣信氏という民家改修の名人がいて、あの方も日本中で仕事をしているんですよ。なぜ長野県からあのような二方が出たのか考えてみたことがあるのですが、長野には谷ごとに小さな孤立した盆地の文化みたいなものもあるし、東京に近いから刺激もあるのではないかと思います。宮本先生の仕事の仕方を見ていると、安心感があります。これは地元でやっていることの安心感だと思います。それから自分の形を持っておられて、コンクリート打放しと瓦を使う、という新しいタイプが出てきたのではないかと思います。

池田 前回の画報で、宮本先生が「街づくりの成功法は“土地の精霊”を活かすこと」とおっしゃっていて、とても共鳴しました。こういう事を言うのが宮本先生だと思う。僕はいろいろな集落や建築を見ていて秋田の鶴巻地区のように、日本の古くからの集落は特に精霊に満ちていると思います。鎮守の森をはじめとして、ちょっと路地を入るとそこに祠があったり、家の中にも竈の神様がいたりといういろんな所に神様がいます。ところが、僕らが東大で学んだことには、そういう精神的空間が皆無です。いかに機能的に作業がしやすい動線にするとか、そういうことしか学べない。精神的空間というのが田舎のような集落に行くと満ちています。宮本先生がどこまで意識しておっしゃったか分からないけれど、きっと、精神的空間が大事だということが無意識に分かっているのではないかと思います。

藤森 そうですね。地方でやっていれば、そういうものに接する機会はありますよね。

池田 戦後の建築の中で、一番欠落している部分は精神的空間です。例えば、昔だったらある程度の規模の団地や集落をつくったら、鎮守の森を必ずどこかへ祀ったはずですよ。それが集落の精神的拠り所となっているのに、今はそういう具合につくった試しがない。

藤森 それは法律でいけないからです。

池田 そうですね。

藤森 集会所など共有のものをつくって、その中にある普通とは違う感じを与える精神的な高揚とか、落ち着いたものをつくることは禁じられていないのだから、そういうことは建築家の力でできるはずですよ。あるいは祭り事ができる場所もつくっていいのですから、その気になればいろいろできると思います。

池田 そうですね。地鎮祭などを行なうのだから、もっと意識してつくってもいいのでは。日本が何千年もかけてやってきたことを、戦後で変わってしまうのは異常です。宮本先生のおっしゃる「土地に精霊がいる」、というのはとても大事だと思います。

藤森 宮本先生は里山のような建築家ですね。

池田 そうですね。